11. 骨スキャンで欠損像を呈した骨病変

角　文明　中島　哲夫
砂倉　瑞良
（埼玉がん・放）
石原　明徳
（同・病）
佐々木康人
（聖マリアンナ医大・3内）
永井　輝夫
（群馬大・放）

骨スキャンは，非特異的であるが，早い病期に陽性像を呈する点で広く利用されており，特に悪性腫瘍の骨転移巣の検索には有用であることが知られている．その異常所見は，ほとんどが放射能集積増加による陽性像として観察されるが，逆に放射能集積欠損像を呈することも知られている．昭和50年11月より昭和54年6月までに，13例の欠損像を呈した症例を経験したので，それらをX線像，胸部 CT，病理組織所見と比較検討した．方法はサール製 LFOV ガンマカメラ，マイクロドットイメジャなどを用い，Tc-99mリン酸化合物約 10 mCi 静注後 3～4 時間で撮像を開始した．

13例はいずれも悪性腫瘍の骨転移巣とみなされた．原発巣では肺癌5例，甲状腺癌2例，子宮頸癌2例，膵癌・前立腺癌・腎癌・骨肉腫が各1例であった．部位は胸骨・肋骨・椎骨および骨盤骨であった．X線像または CT との比較では，11例が溶骨性変化による骨破壊像をみとめ，1例は明らかな変化を認めなかった．1例はX線像が得られなかった．骨スキャンの欠損部の周辺の放射能集積増加が6例にみられ，うち2例はX線像で反応性変化がみられた．塩化タリウムによる腫瘍スキャンを行なった2例は，共に陽性像を呈した．4例について病理組織所見を検討したが，いずれも腫瘍により骨組織が著しく減少していた．腫瘍と接する骨組織に炎症性変化はみとめなかった．

原発巣が肺癌であった5例は，全て組織型が扁平上皮癌であった．

12. Sterno-kosto-klavikuläre Hyperostose の骨シンチグラム

宮島　昭博　伊丹　康人
沢井　博司
（慈恵医大・整形）
大森　薫雄
（県立厚木・整形）

胸骨，第1肋骨および鎖骨をとり囲む領域に異常骨化をもたらし，周期的な疼痛，腫脹を訴え，時に掌蹠膿疱症あるいは鎖骨下静脈の閉塞を伴う疾患で，特に両鎖骨の紡錘状肥大と，胸鎖関節の強直を示すものを1975年に Köhler らは，Sterno-kosto-klavikuläre Hyperostose という名称で報告している。わが国では，20数例の報告を数えているが，最近われわれの教室でも，4例の同様の症例を経験し，骨シンチグラフィーを行ない，興味ある所見を得たので報告した．

使用核種は，^{99m}Tc-MDP で，3時間後に骨シンチグラフィーを行なった．

症例は，いずれも男性で，35歳，45歳，48歳，54歳であった．主訴は，両鎖骨あるいは片側鎖骨部の疼痛，腫脹で，くり返し，長年にわたって出現した．X線所見では，2例は，両鎖骨部の紡錘状膨隆がみられ，鎖骨，胸骨，第1肋骨の間に異常骨化像をみているが，他の2例では両鎖骨の紡錘状肥大を認めなかったが，鎖骨，胸骨，第1肋骨の間の異常骨化像は認めた．骨シンチグラムでは，鎖骨，第1肋骨，胸骨全体にわたり，あるいは頸部にも，強い RI の異常集積像を認めた．

本疾患の原因は不明であるが，局所の熱感，腫脹，また血沈値の亢進，CRP 陽性などから炎症を基盤とすることは明らかであるが，日常，骨シンチグラムの読影の際，このような部位に，異常集積像をみたら，前述したような疾患も考慮にいれる必要がある．

Presented by Medical*Online